

「社会性の起原—ホミニゼーションをめぐる」

2020年度第5回共同研究課題研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2020年12月19日（土） 13:00～18:30

2020年12月20日（日） 10:00～16:00

場所： オンライン会議

報告者：

1) 床呂郁哉（AA研）

身体装飾から人類進化を考える—認知革命からコスプレまで

2) 竹ノ下祐二（AA研共同研究員・中部学院大学）

霊長類における社会的配慮：サルを「経験する主体」として捉えるための試論

3) 山越言（AA研共同研究員・京都大学）

社会性の起源をチンパンジーの文化から再考する

4) 西井涼子（AA研）

情動（affect）と社会性、そしてフィールドワーク

3. 内容（要旨および質疑応答・議論）

3-1) 身体装飾から人類進化を考える—認知革命からコスプレまで

（床呂郁哉）

要旨：

本報告では人類進化という大きなテーマに関して、身体装飾 (body ornamentation) というトピックに焦点を当てて考察を行った。ここでいう身体装飾とは、主に衣服、装身具、仮面等の着用、ボディペイント、化粧、仮装、刺青など身体加工等を含む行動の総称である。

身体装飾というトピックから人類進化を考察するという試みを聞いて、もしかすると奇異に思う者もいるかもしれない。その印象は必ずしも的外れではない。一昔前(?)の考古学、ないし技術史その他の分野等において、人類進化で「もの」(物質文化)が取り上げら

れる際には、火や石器・武器などといった実用的（プラグマティック）な道具が重視される傾向（プロメテウス史観、ないし「ホモ・ファーベル」的人間観）が強く、それに対して装身具や装飾品などは人類の生存にとっては不要不急のいわば「二次的」な重要性しか持たないといった暗黙の先入観が存在していたからだ。

しかしながら、20世紀後半以降の先史考古学や先史人類学等の研究の進展に伴い、いわゆる「認知革命」（Cognitive Revolution）論におけるアートやシンボリック行動への注目などの高まりの中で、装飾品を含む身体装飾に関心が高まっている（Klein, R. 2008、ミズン 1996）。この認知革命論に関しては、その後、いくつかの有力な批判を経た近年でも、多くの研究、例えば世界的ベストセラーとなったハラリの著作（2016）等でも踏襲されている（ハラリ 2016、池谷 2020）。私見では、認知革命論は、身体装飾を含むシンボリック行動への注目を促したという点で評価されるべきであるが、他方で少なからず問題点を含んでいることにも留意すべきである。その難点の一つは、同議論が、「革命」によるホモ・サピエンスと他のホミニンの断絶や非連続性（裏を返せばホモ・サピエンスの例外性）を強調しがちである点だ。

この点に関しては、その後の先史人類学等の研究の進展につれて、認知革命論への批判や再検討を含む議論が展開されている（McBrearty & Brooks 2000, Hoffmann, D. et al. 2018 等）。こうした再検討を通じて、認知革命論の想定とは対照的に、ホモ・サピエンスとネアンデルタール人など他のホミニンの関係を架橋不可能な断絶ではなく、より連続的に捉える見方が次第に有力になりつつあるように思われる（例えば Zilhao 2012, Finlayson 2019）。

次に報告者は、ヒトとヒト以外の動物における広義の身体装飾的行動の比較に関して触れた。ヒトとヒト以外の動物における身体装飾と美意識の連続性と非連続性に関しては、実はC.ダーウィンも『人間の由来』などで指摘している点でもある（ダーウィン 2016）。近年の生物学（動物行動学）では、例えば鳥類のオスによるメスへの求愛の文脈での美しい飾り羽根などの誇示（ディスプレイ）行動等に関する知見が蓄積されている。こうした性的装飾や誇示行動が進化したのは、それらがつがい候補の資質と状態について、偽りのない明確な情報を示す、とする「正直なシグナル理論」や「ハンディキャップ仮説」などが進化生物学で提唱され、その批判を含む議論が続いている（長谷川 2005, プラム 2020）。その後、「正直なシグナル理論」は人間社会の装身具などの考察へも応用が試みられている（例えば Kuhn 2014）。

このうち報告者はとくにクーンの正直なシグナル理論の人間社会への応用的研究（Kuhn 2014 等）へのレビューを行い、それが概してシャノンの情報伝達論（コード・モデル）に依拠しているという点などに批判的な検討を行った。さらには、同理論の枠組みでは、装身具などの身体装飾は社会の複雑性増加に伴う社会的地位やアイデンティティの「表現」「反映」と看做されがちであるという点を批判し、むしろ人間社会においては、例えば化粧、演劇、仮装、コスプレなどを含む「正直でない」身体装飾行動に注意を喚起した。

この文脈において報告者は、アジア諸国におけるいわゆるコスプレや「カワイイ・ファッ

ション」に関する報告者のフィールドワークで得られた知見などを紹介しつつ、それらを上記の「正直ではない」装飾や身体変容の問題に深く関係する事例として考察を試みた。例えば、コスプレにおいては生得的な身体的属性（年齢やジェンダー等）だとか元々の社会的属性とは異なる見え姿への変身（変容）をその本質的要素として含む。また、「カワイイ・ファッション」においては、シグナル（とそのメッセージ）の多義性や恣意性を顕著な特徴としており、これらの性質は必ずしも先述のシャノンのコード・モデルに基づくパラダイムによっては適切に考察することはできない。

これを踏まえて報告者は、社会人類学者のジェルやその他の論者による考察（Gell 1998, Menninghaus 2019 ほか）を補助線としつつ、以下のような論点に注目した。すなわち、既存の身体的・社会的属性やアイデンティティの「反映」や「表明」というよりも、むしろそれらの属性を変化させ、変身・変容（メタモルフォーシス）させるようなアクタントとして衣服や装身具・化粧などの身体装飾を捉えるような視点である。この議論の延長線上で最後に報告者は、人間社会における身体装飾行動は、いわゆる想像的／虚構的（imaginary/fictional）な社会性の（再）構築や創出にダイレクトに関与する行為として捉えることも可能ではないかとの問題提起を行った。

## 参考文献

- ダーウィン(2016)『人間の由来（上・下）』長谷川真理子訳、講談社学術文庫。
- Finlayson, C. (2019) *The Smart Neanderthal*. Oxford: Oxford University Press.
- Gell, A. (1998) *Art and Agency: an anthropological theory*. Oxford: Clarendon press.
- ハラリ、Y.N. (2016)『サピエンス全史（上・下）』柴田祐之訳、河出書房新社。
- 長谷川真理子（2005）『クジャクの雄はなぜ美しい？（増補改訂版）』紀伊国屋書店。
- Hoffmann, D. et al. (2018) “Symbolic use of marine shells and mineral pigments by Iberian Neandertals 115,000 years ago.” *Science Advances* 2018(4)
- 池谷和信編（2020）『ビーズでたどるホモ・サピエンス史—美の起源に迫る』昭和堂。
- Klein, R. 2008 “Out of Africa and the evolution of human behavior.” *Evol. Anthropol.*
- Kuhn, S. L. (2014) Signaling theory and technologies of communication in the Paleolithic. *Biological Theory* 9.
- McBrearty, S. & Brooks, A. (2000) The revolution that wasn't: a new interpretation of the origin of modern human behavior. *J. Hum. Evol.* 39.
- Menninghaus, W. (2019) *Aesthetics After Darwin: The multiple origins and functions of the arts*. MA: Academic Studies Press.
- ミズン、S. (1996)『心の先史時代』松浦俊輔他訳、青土社。
- プラム、R. (2020)『美の進化』黒沢令子訳、白揚社。

質疑応答と主な議論：

<コスプレと普段着のちがい>

- コスプレと普通の身体装飾とはなにか違いはあるか。  
→ 衣服の機能は、(1) 実用性、(2) 表象(地位等)、(3) 変容であると言われている。コスプレは、(3)の側面が強調されているように思う。  
→ コスプレは異性装が多いため、LGBTのような方が多いのではと考えたが、聞きとり調査の結果はそうでもないようだった。女性が女性のコスプレをするとき「女装する」という表現をする。普段われわれが、「女性が女性の服を着る」・「男性が男性の服を着る」ことも広く考えれば、コスプレをしていると言ってもよいのではないか。

<性選択と装飾品>

- 鳥の装飾はオスのメスに対するシグナルである。ヒトでは、性をアピールするためにまず装飾品ができ、その後女性が装飾品を身につけるようになったのだろうか。また、男性の装飾品についてどう考えるか。  
→ 男性と女性のどちらが先に装飾を始めたかは判断が難しい。骨と一緒に出土しない装飾品の場合、どちらが身につけていたかを知ることが難しい。また、非西洋社会では、特定の性別のみが、装飾するというわけではない。ヨーロッパ近代以降は女性が装飾する傾向にある。
- コスプレは異性を惹きつけるシグナルとなっているか。  
→ 女性のいわゆる『カワイイファッション』等は、必ずしも男性目線でモテることを主な目的としたものではない。コスプレグループの内部に向けてのアピールかと思われる。
- 発表ではシグナルの恣意性と動物の求愛ディスプレイとをつなげていた。性選択ではないとのことだったが、コスプレの現場ではどのような選択が生じているのか。規範的なレベルや、コスプレの文化的な文脈においてある種の選択があるのでは。動物ではディスプレイは空疎な行動パターン(儀式化され記号化されたもの・過剰)を使用する。この点において、例えばヒトが、「必ずこの制服を着る」ようになる過程とつながる部分はあるだろうか。  
→ ヒトとの連続性を考える上で参考にしていきたい。

<正直なシグナル理論について>

- 正直なシグナル理論の解釈が、人類学分野においてシグナルを発している「個体が」正直であるという異なる意味に変わっているときがある。本来は「シグナル自体」に嘘が侵入しにくいという意味である。

→正直なシグナル理論ではヒトの身体装飾はうまく解釈できないのではないかと考えている。

- シグナルは、身体と不可分である場合（例、クジャクの羽）と、その所有権が移動可能な場合がある。装飾品は交換が可能であり、所有権が移動する。高価な装飾品は嘘が侵入しにくい、盗みなどで手に入る場合がある。

→そうですね。装飾品は移動可能である。認知革命の文脈で、クーンが触れているが、ネアンデルタールは交易品のネットワークが非常に小さかったが、ホモ・サピエンではそのネットワークが大きく、装飾品もその中に含まれていたようだ。

- 「正直なシグナル理論」は、情報を盛ろうとしても受け手に正直な情報が伝わる。コスプレの場合も見る側の意見がほしい。コスプレすることで「本来の自分」を表現していることはあるだろうか。

→コスプレをし、コスプレ仲間から承認を得ることが重要なようだ。コスプレコミュニティでは仲間がシグナルの発し手でもあり受け手でもある。見る側の視点から調査をする必要がある。

→「かわいい」を女性が男性に媚びる行為として解釈する研究者もいるが、かわいい文化の「かわいい」は「つっぱり」のほうの意味合いが強い。

#### <装飾の変容性について>

- 髪型、服装そして化粧などの変容的な部分はおもしろい。化粧が性選択のみでしか解釈されてこなかったのは不思議。現代日本では女性の方がよく化粧をする。それはなぜなのかを考えることで、化粧やコスプレの異なる側面を読みとれるのでは。

- 考古学的には装飾を無駄なものとして扱ってきた。実用的なものから離れるほどいろいろな解釈が可能で難しい。無駄なものといわれているものや服装の自己変容をもっと知りたい。

→zoomの仮想背景やアバターなど近年の新たな自己身体像の表象の在り方もおもしろいと感じている。

- サルはあまり装飾をしない。身振りや動作はサルにもみられるため、ヒトのコスプレ時の姿勢や動作をサルと比較できないだろうか。

→考えていきたい

### 3-2) 霊長類における社会的配慮：サルを「経験する主体」として捉えるための試論

(竹ノ下祐二)

#### 要旨：

本発表では、ヒト以外の霊長類（以下、サル）を見る上で両立しえないふたつの視点—サルを、自由意志を持ち経験する主体とみなす視点と、適応度の最大化に向かって外界からの刺激に合理的・効率的に反応するアルゴリズムとみなす視点—の〈あいだ〉を取り持つ視点のありようを考察する。

本研究会（研究課題）では、社会性を「群居という状況における複数個体間の相互行為のあり方」と定義する。霊長類社会生態学は、まさにこの意味における「社会性」について、個々の種や個体群におけるそのありようを整理・類型化し、それに説明を与える枠組みである。その基本的な考えかたは、食物の分布に応じたメスの採食戦略がメスの群れかたを規定し、それに繁殖をめぐる雌雄の利害対立が作用した結果、特定のサイズと構成をもった群れが実現し、さらに群れ内、群れ間の個体間関係のありようも決まるという、アルゴリズム的（機械論的）視点に立脚する（詳細は中川・岡本, 2003 を参照せよ）。

一方、ネーゲルが「行為主体という概念のうちには、行為は出来事であり人は物である、という事実と両立不可能な何かが含まれている。」と述べるように（ネーゲル, 1989）、サルを外部から眺め、かれらの行動を外部要因（環境要因・社会的要因）で説明しつくしてしまうと、意識・経験主体としてのサルが見えなくなる。よって、サルの主体性を捉えるには、サルを外部から眺めるだけではなく「内的視点」を導入することが不可欠となる。

社会生態学（＝機械論）も内的視点（＝主体論）も、それを徹底する立場を貫くならば、決して相容れることはない。しかし、いずれの視点もサルの野外研究から経験的に得られた視点であるという原点に立ち返れば、両者の共存は十分可能である。意識・経験する主体である個々のサルは、「折りに触れ」何らかの意思決定が必要な場に直面し、葛藤を踏まえて主体的に意思決定する。その積み重ねが、社会生態学モデルに「ほぼほぼ」合致するような社会性を実現する。そのように考えるのだ。

Budaevら（2019）は、Aureliら（2008）の離合集散ダイナミクス論に代表される、外界に対する適応的な反応が進化によって身につけられたシンプルな行動ルールにしたがって生じるとする考えを批判し、主観的に環境と自己を認知し、場に直面して葛藤・意思決定する動物の内的アーキテクチャを提唱する。これはいわば「内的視点のアルゴリズム化」であり、ネーゲルが述べるような真の内的視点とは異なるが、内的視点と機械論の〈あいだ〉としては有用と思われる。

しかし、アルゴリズム化された内的視点による意思決定が結局は適応度の最大化に対して効率的な意思決定を導くというのであれば、あえて内的視点を考えることの意味は半減する。観察者がサルの中に意識・経験する主体をこれほどまでに見出すのは、かれらが意

思決定に際して合理的な解が一つに定まらないような根源的な葛藤を抱える存在だからではないだろうか。

誤解されがちだが、アダム・スミスによる「神のみえざる手」は、人間の利己性のみから得られるものではなく、他者と共感し、評価し、他者からの評価を気にする存在である人間の道徳感情に根ざすものである。スミスは、人間には他者の称賛を得るための「富への道」と「徳への道」という、いわば「利己性」と「利他性」とでもいえるような二種類の志向性が備わっており、このふたつの志向性が相補的に作用して資本主義社会に調和をもたらされると考えた（スミス, 2003）。

これを一種の寓話としてサル社会を考えたとき、群居という状態にあるサル個体には、「優越」と「平穏（菅原, 2003）」という斜行する二種類の志向性を見出すことが可能となる。サルは一方では自らの適応度を上昇させようと、現状を変更し他者から抜き出すようとするだろう。他方、ともに生きる仲間の個体の適応度が低下するのを避けようと、自らの行動が社会の定常状態に与える影響を小さく保とうとするだろう。後者の志向性を「社会的配慮」と呼びたい。こうした社会的配慮は、群れの遊動時における活動の同調・非同調の中に見出すことが可能であろう。

## 引用文献

- Aureli, F., C. M. Schaffner, C. Boesch, S. K. Bearder, J. Call, C. A. Chapman, R. Connor, A. D. Fiore, R. I. M. Dunbar, S. P. Henzi, and Others (2008) Fission-fusion dynamics: new research frameworks. *Curr. Anthropol.*, 49(4): 627–654.
- Budaev, S., C. Jørgensen, M. Mangel, S. Eliassen, and J. Giske (2019) Decision-Making From the Animal Perspective: Bridging Ecology and Subjective Cognition. *Frontiers in Ecology and Evolution*, 7: 164.
- 中川尚史・岡本暁子 (2003) ヴァン・シャイックの社会生態学モデル：積み重ねてきたものと積み残されてきたもの。『霊長類研究』, 19(3):243–264.
- トーマス・ネーゲル（著）永井均（訳）（1989）『コウモリであるとはどのようなことか』, 勁草書房.
- スミス, A (2003) 『道徳感情論(上・下)』, 岩波書店.
- 菅原和孝 (2003) 感情の進化論. 西田正規・北村光二・山極寿一(編)『人間性の起源と進化』, 昭和堂, 京都:31–62.

## 質疑応答と主な議論：

### <内的視点と外的視点の間>

- 社会生態学な視点に内的視点を取り入れたのは発表者ならではある。しかし、内的視

点を外的視点に変換しただけではないか。ネーゲルの話しは生き物の主観的な世界は客観的な視点に変換できないことを主張している。内的視点に独自のアプローチが必要で、この方法でよいのだろうか。

→ご指摘のとおりである。ネーゲルの話しを引いたのは、内的視点との〈あいだ〉を目指していることを強調したかったからである。

- 内的視点が意思決定の話となっている。よく言えばわかりやすいが、内的視点が狭いものになった印象がある。例えば、ゴリラの「待つ」という行為は意思決定の話でよいのか。

→配慮と意思決定を同じように扱っていたが、配慮に意思決定は含まれなくともよい。待つは配慮のほうである。意思決定しない中で配慮するということが織り込まれていると考えることもできるかと。

→人間も動物も常に葛藤しているわけではない。ただ、ときどき、はっきり葛藤する状況があり、重要な意思決定がなされる。具体的な葛藤場面としては、進みたい道が異なるときなどのやりとりから見出していく。

#### <意識経験する主体としての動物について>

- トマセロ (Michael Tomasello)によれば、動物を意識経験する主体であると考えられることには議論の余地はない。むしろ、意識や経験が、いかに重なっているか、いかに異なっているかということを議論している。いかなる形で主体でありうるかはヒトとサルでは異なるだろう。

→絶対的な主体という考えと機械との間では、たしかに当然そういう議論となる。ヒトとゴリラの主体の在り様の違いを、考えられる話しができていないかを考える。

- 主体性と意識経験性は異なる。内的な主体の特徴として意思決定を挙げているが、意思決定はアルゴリズムと必ずしも対立しない (例、AI との将棋)。「主体性」と「意識経験性」どちらに着目するのか。「主体性」は、内的な視点でなくとも記述可能ではないか (例、アルゴリズム、3人称的な記述)。「意識経験性」は一人称性で語られ、心理・認知分野の言葉で言うと、クオリアや内的な経験につながるだろう。

→意識経験のほうに着目していきたい。意思決定するということの前に、場に直面している。場に直面することは、常に生じることではない。例えば、普段見過ごしている絵の前で思わず立ち止まってしまうというときに場に直面しているという感覚がでてくる。そして、特に何かをするわけではなく、その場から離れて再び歩き出すというような、そういうことをする存在としてサルをみたい。調査可能なテーマで、場に直面するという現象そのものを観察することは非常に難しい。意思決定は行動としてあらわれるので、観察は可能であろう。

<優越と平穩：既存の理論との関連等について>

- 「優越」と「平穩」の志向性のようなものによって、霊長類の中での進化を考えられるのか。平等に扱わないと不満をもつということはサルにおいてもあると聞く。相手の配慮を要求することもセットに考えられるので理論として有望かもしれない。  
→「優越」と「平穩」は、使えるのではないか。リスクを回避することと、リスクをとるという軸は生物全体にみられる。霊長類の社会を考える上で、個 vs 全体の社会的な状況で考えた際に、拡張できるのではないか。
- 「優越」と「平穩」は、ゲーム理論のタカ派とハト派を思い浮かべる。どのように同じでどのように違うのか。  
→検討します。
- 究極要因と至近要因が前半部分では混同している。意思決定と言った際に、「ゴリラが全体に配慮すること」と「淘汰の中で選択されたから皆がやるようになるというプロセス」とが交差している。  
→Budaevら(2019)の論文は、ティンバーゲン(Nikolaas Tinbergen)の4つの問いを考え直すきっかけとなるのではないだろうか。生理メカニズムは基本的には反応だと習ってきた。しかし、至近レベルで生じることも、目的志向的な行動のモジュールとして進化しているという考えがでてきている。今後整理していく。
- 間接互惠では、少なく分配された人に対しどう配慮するかを考えている。ヒト以外の動物で間接互惠の話はどの程度適応可能だろうか。言語により間接互惠が安定するという話がある。今回の話でも、間接互惠の話を組み込む予定はあるか。  
→今回は間接互惠の話は重要だと思っていない。互惠的利他行動で説明できても問題ないと思っている。しかし、異なる考え方が可能であることを示していきたい。
- 相対適応度のアロケーションの図は、パイの奪い合いとなっている。ホモ・サピエンスの進化は、生息地を移動し、パイ自体を大きくするという選択がかかったと思われる。ある個体の適応度を上げる行動によって全体のパイの大きさ自体が大きくなるということは考えているか。  
→自然選択の文脈で考えると、パイの大きさは問題とならない。現実的に関わりあう個体の社会的なネットワークの中で絶対適応度を考えた場合は、パイの大きさは可変である。自分も増やし、同時に他のメンバーの適応度を減らさないことはあるだろう。今後、詰めて考える。

### <配慮の分析方法について>

- 「配慮」という言葉自体がヒト的な意識や経験に回収されている。配慮かもしれないが、そこであらわれる個体の多様性をおさえこむような行動の在り方というものがあるのでは。  
→「配慮」という言葉を使用したのは、積極的な自己犠牲である利他行動とは別の言葉を使用したかったからである。また、特定の個体を気遣うのではなく、周りに配慮するという意味合いを強調したかった。
- 内的視点と配慮の話は関連があるのか。物理的に外在するデバイスを考えたほうがよいのではないか。その場合、内的視点は必要としない。無理をし集まるため他者に配慮をするのである。例えば、イヌイットにおける、食物の分かち合いは配慮だろう。分かち合いをしなければ、動物を狩れないこともあるのでそれがデフォルトとなる。ジレンマをつくりだす現象がヒトとサルで共通していれば、概念化できるのでは。  
→霊長類学的な問いとして成立することを調査しながら、実際におきていることが何かわかった際に、デバイスを後付けし、「ゴリラというものはこういうふうに縛られているのです」というように話せるようになりたい。ジレンマをつくりだす条件をみていく。「優越」と「平穏」という視点で、ゴリラでは具体的にはこうしている、という議論をしていきたい。
- サイエンスでは、アルゴリズム的記述ではない、習慣的な記述は無駄なのか。  
→ある行動が習慣であるというためには、他の要因を潰さなければいけない。生物学的な問いとして最初からはあらわれない。

### 3-3) 社会性の起源をチンパンジーの文化から再考する

(山越言)

#### 要旨：

幼少のころ、「ひとはひとりではいきられない」のか、という問いに囚われていたことがある。同様に、「チンパンジーはひとりでいられるか」と問うてみるのも、思考実験として興味深いと思う。

出口康夫(2020)は、近代社会は「できる」ことを人間の本質とし、自己決定を倫理や法の根本に置いたが、人間より「できる」AIによるシンギュラリティが話題になるこんにち、人間を「できない」存在としてとらえ直す必要性を論じている。

教科書的に考えれば、ヒトとチンパンジーの共通祖先からヒトの系統が分岐したのちの進化過程は、食物知識、道具文化、火の使用と調理、共同狩猟、分業、言語といった生存の

ための知識・技術が、世代内、世代間の社会伝達に依存するようになり、ヒトが文化・文明により自然を克服して世界中に繁栄する物語である。しかしながら、出口に倣って言えば、この物語は、同時に、ヒトが「ひとりでいきられな」くなっていく過程であると考えられることもできる。

新たな物語を書き直すための出発点として、野生チンパンジーの道具文化を再考してみる。野生チンパンジーは、ヒト以外の霊長類種の中で唯一、長期間観察されているすべての群れで常習的な道具使用が観察されている。道具文化の生存への寄与については、著者によるギニア・ボソウでの研究事例が示唆したように、道具による採食が年間を通して採食時間の12%に達し、さらに、食物窮乏期を道具使用により克服している様子も見られている。なお、チンパンジーの道具使用が、ボソウのように救荒食物を対象にするか、通常食の文脈で行われるかについては、現在研究事例が二分されている。

いっぽう、飼育条件下での実験研究では、道具文化が依存する社会伝達過程において重要な模倣行動について、チンパンジーと現代人との間の質的差異が指摘されている。なかでも、ヒトの文化が累積的で後戻りができない（ラチェット効果）ものであるのに比べ、チンパンジーの文化はそうではないという指摘がある。

現在観察されているチンパンジーの道具文化を、変動が激しい環境への適応という視点から考えると、道具文化は形態的な適応により手に入れられる（ひとりでいきられる）食物以外の食物レパートリーを柔軟に融通することで、素早く採食ニッチを拡大する機能がある点が注目される。いっぽう、ラチェット効果を含むような道具行動の複雑化は、変動が激しい環境下においては、道具や対象食物など多様化した構成要素それぞれの利用可能性が途絶えたときに、文化の消失にあう危険性を増大させる可能性がある。

ヒトは文化の発達による生活の変化に形態的にも適応し、たとえば大脳化とそれに伴う消化器官の縮退により、すでに「ひとりでいきられな」い身体になっているが、チンパンジーでそのような傾向はいまだに見いだされていない。チンパンジーの道具文化は、おそらくは変動の激しい環境を生き抜くために機能しているが、後戻りができ、「ひとりでいきられ」る段階にあえて留まっていると考えることができる。

おそらくは、道具使用を発達心理学的に見る研究イメージに影響され、チンパンジーの道具使用をだんだん「できる」ようになる過程として見る認知バイアスが、研究者の間でも強く働いてきたと思われる。チンパンジーの道具行動を、あえて「できない」段階に留まったものとしてとらえ直すことが必要かもしれない。そこにはまた、「できない」存在として、ヒトをとらえ直す際の出発点・参照点としての大きな意義があるだろう。

#### 質疑応答と主な議論：

##### <道具使用と形態、基盤使用の位置づけ>

- 道具使用と形態の対比だけでなく、基盤使用や操作を必要とする掘り出し採餌など、資

源の枯渇に対処する方法も視野に入れる必要があるのではないか。

→文化行動か否かを検討する必要があるが、オマキザルやマカクで見られる基盤使用や掘り出し採餌の例は、チンパンジーの道具使用と生態学的には違わない。現在観察されるものは、後戻りできない形で変化する環境に対して、群れの中の食物や道具使用に関する知識が消えることをも織り込んだ適応の結果なのだという霊長類の文化観、採食技術観を持ちたい。

- 道具使用だけを特別視しないという視点に同意するが、チンパンジーに道具使用が多く見られるのは確かである。その根拠を知性に求める必要はないが、道具使用の技術は認めたくえで追及していくべきテーマではないか。  
→外的なものに対する行動傾向として、チンパンジーにはチンパンジー的なものが身体化されているという気はする。行動傾向が種ごとに決まっている、というくらいの解釈だと考えている。
- 生態学的危機に対し、危機の前後で形態が変化した事例が鳥類で報告されている。同じようなことがチンパンジーにも生態学的危機の前後で起きうるが、道具使用や採食戦略については、形態レベルとは違うことを考える必要があるのではないか。  
→行動生態学における最適採餌戦略では、食資源が窮乏すると多様なものを採食し始めると考えられているが、大型類人猿ではそれがあまり見られない。

#### <社会・集団との関連>

- 社会的包摂についてももう少し説明がほしい。  
→包摂された障害者や弱者が不自由なくできるような努力をしようとする社会を作る動きを指している。できる/できないという能力による区分が最終的にはひっくり返るような社会の在り方を考えている。みんなが障害者で一人では生きていけない、できないものとしてでも生きていけるという議論を念頭に置いている。
- 集団レベルでの変化を考える場合、他個体がいることによって対処方法の拡散の仕方や変化が、個体レベルのものとは異なるのではないか。  
→一人で対処するか多数で対処するかという発想はなかったのでもいい指摘だが、それが何か議論として生かされるかはよくわからない。短期的な一つのタスクを解くのか、長い期間にわたるカタストロフに対して無防備な一人としてそこに放り出されるのか、カタストロフの種類によっても変わるだろう。実際に観察することは困難だが、チンパンジーの文化を理解するためには思考実験として重要である。

#### <「できる」能力と行動>

- 食べることができる(能力がある)ということと、森の中で一人で食べるということは、違うフェーズではないか。一人でやっているように見えて、その背後に社会的なものの存在を想定できるが、そのことについてどう考えるか。  
→指摘に同意する。チンパンジーを、一人で森の中で生きていける存在ととらえるか、あるいは、自律的な社会に包摂された存在と考えるかというところに、議論が混乱する原因がある。
- 実際のポテンシャルに対する実際のアクティビティ、という点に課題がある。道具を使用する能力を持っていることと、道具を使用することをどう使い分けられるか。  
→実験下では、チンパンジーはものを扱いがちだという比較研究はある。子供たちが、ものに対して特別な興味を持つこと(振り回したり、引きずったり、抱いたり)が発達の萌芽だとするなら、そういうものを観察することは多い。単純に一人で生きていける個体の外側にある文化がそれを可能にしているだけでなく、遺伝的な基盤を持った形でものに対して反応しているような印象はある。

#### <ヒトとの比較・関連>

- ラチェット効果とチンパンジーの対比が興味深い。人類学において認知革命の見直しや批判が出ているなかでコナード(Nicholas Conard)らがモザイクポリセントリックモダニティという概念を提唱している。チンパンジーの文化の消滅をテーマとしているが、ヒトもラチェット効果だけでなく生まれた文化が消滅したりしており、ホモ・サピエンスとも連続的にみることとつながるかもしれない。  
→ヒトの話はまさにその通りだと思う。チンパンジーで文化が消失したという話は今のところないが、大事なポイントであると思う。
- ネアンデルタールやサピエンスでもシンボリックな行動について論争がある。十分な認知能力があれば必ずやるわけではない、できるけどしないことがある、という話がサピエンスではある。認知研究では「できる」パラダイムが多いが、野生のチンパンジーに対して、そのような考え方はできないのか。  
→認知革命に関してはサピエンスの段階での話だと思う。チンパンジーに関してはサピエンスの文化の話とは違うものだと思う。  
→認知研究では、人間の実験者が、人間が理解可能な能力やタスクをチンパンジーに試している。チンパンジー側から見ると、数字を理解することがチンパンジーにとってどういう意味があるかはわからない。認知科学者が求めている区分けや質的な能力をそのままチンパンジーに当てはめるのは問題だが、何らかのものが見えてきたのは確かである。

- 霊長類の石器利用の考古学的検討に関する報告があるが、それが今回の話につながるようなことはあるのか。  
→タイ森林で、現在チンパンジーがナッツ割りを行っているのと変わらない環境から石器が出てきたという報告がある。アブラヤシのような人工景観と、何千年か安定した環境との対比は、ニシチンパンジーの環境適応を明らかにする点で面白いと思う。

### 3-4) 情動 (affect) と社会性、そしてフィールドワーク

(西井涼子)

#### 要旨:

コロキアム「ヒトを見るようにサルを見る」(2020年9月5日)の次のような田辺明生氏のコメントはとても刺激的で議論を活性化させる興味深いものだった。

「人文学において『ヒトを見て語る』ときには、ヒトの意識についての認識が欠かせない。単なるアルゴリズムとしては描かない。・・・ただし、昨今の意識研究や脳研究の発達により、ヒトが前意識的なアルゴリズム(情動 affect)によって動かされているところの大きさが明らかになっており、人文学においても、人間の自由な意思や精神をあまりに強調する極端が避けられるようになってきている。自己意識に基づく自由と、アルゴリズムによる決定という二つの極のあいだで人間認識が揺れている現状。」

ただ、情動をアルゴリズムとして扱う表現に違和感をもった。情動理論は、確かに近年の情動理論(affect theory)における「情動 affect」は、合理的主体としての人間への批判としておこり、主体性や合理性とは逆に、人間の行為が非意図的な、本人が認知しないところでおこっていることではあり、それを身体に着目することで個と集合性の問題にアプローチしようとする試みといえる。しかし、それはコンピューターで計算可能なアルゴリズムといった身体/情動の合理的インターフェースとは捉えられない広がりをもつと考える。そもそもアフェクトは、現実がこうした二項対立から出発しては捉えられないというところから出発している。

2000年代以降、「情動論的転回 the affective turn」と称せられる一つの学的潮流がみられる。この近年のアフェクトへの関心は、一言でいうと主体性や合理性とは逆に、人間の行為が非意図的な、本人が認知しないところでおこっていること、それを身体に着目することで個と集合性の問題にアプローチしようとする試みであるいえよう。アフェクト論の二つの動向がみられる。

トムキンズやセグウィック、ダマシオなどの精神生物学的アプローチとスピノザ・ドゥルーズ的アプローチである。これら二つの傾向はどちらも、人間行動を、行為者本人の意図や意識より、我知らず身体として行動する側面に焦点をあてる。その共通点についてレイズは、感情はハードウェアに組み込まれた神経学的反応であると論じたトムキンズと、スピノザ・ドゥルーズ派のマッサミは、「アフェクトは身体に埋め込まれた意識や認知の閾下で働

く自動的な反応である」とみなす点で共有しているとする。それらはともに、アフェクトのシステムと、意図や意味、認知を別のものとして推定している。

こうしたアフェクト論は、これまで見逃されてきた人間の側面に光をあて、密かに我々の生に重要な影響をもたらしているものに目を向けさせたという意義をもっているといえよう。しかし、もう一方で、こうした見方はアフェクトの問題を否定的な形で捉え、西洋近代的な人間観の余剰の部分に還元してしまうとい傾向があることも指摘できる。郡司がダマシオを批判的に検討しつつのべるように、知性のありかを心から身体に移すことでもなく、また意識から無意識に移すことで、これまで見落とされていた身体の働きを再評価することでもなく、アフェクトの概念を通じてこれまでの世界が根本的に転倒され、全く新たな世界に生きる視野のもとで我々の生を捉えなおすことである。それは、アフェクトし、アフェクトされるという作用の中で、人間も動物も植物、すべての存在が生まれ、崩壊し、消えていくという「アフェクト/情動的世界」を、目に見えるものだけでなく、生の潜在性から生きる世界を往還する力に着目することによって、世界を新たに理解しなおす試みである。

アフェクト論からフィールドワークを考える。人類学的フィールドワークは、みてわかることだけではない。身体としてそこにいることが重要である。なぜ、身体としてともにあることが重要なのか。

日本においては1990年代に入る頃から展開されるようになった新しいフィールドワーク論においては、感性にもとづいたフィールドワークとでもいえる側面を強調される。フィールドワーカーが身体を持ち、様々な状況において感情的にも反応する存在であることから出発し、「他なるもの」に遭遇したときの驚きや違和感に正面から向き合うことを提唱する。フィールドワークは五感を通して感じる「身体知」にもとづき、対象のきわだった性格を直観的に把握することであるとされる。つまり、新たなフィールドワーク論では、科学的であろうとすることより、フィールドワークの原点である個人的な感動や、「異なるもの」への驚きや怒り、嫌悪を素直に感じ表現することの重要性が指摘される。フィールドでの経験・感情・出来事と、人類学的思考が生まれ、生成されてくるプロセスをつなげ、その両方を示すことが重視されているのである。

ここで問題となってくるのは、フィールドにおける個人的経験がいかに普遍的な人間性についての知見につながるのかといった、社会科学において主観主義と客観主義、個人と社会といった二元論の克服が試みられてきた古典的問題構成である。そして、現在の新しいフィールドワーク論においては、この問題を身体に着目することにより乗り越えがはかられている。「感性」、「身体知」、「直観」、といった客観的に評価し捉えることが難しい言葉で表現しようとしていることは、個を超えた集合的なものへのアクセスの回路である。

フィールドワークとは、まず、身体として巻き込まれる過程で外部に自らを開き、待ち、それでも届かない外部を感受しつつ自ら変容していく過程であろう。これまで人類学的フィールドワーク論で、理論的説明ができず、「直観」とされてきたのは、それが意図的に手にいれることができない、それは深く生の潜在性から到来するものを「待つことで授かる」ものだからではないだろうか。それは、アフェクト論でいう、自己の意図や意識を主張する主観的立場でもなく、自己を外部から超越したのものとして外におく客観的立場でもなく、より大きな生の流れと個が融合するところで、身体としてアフェクトしアフェクトされると

ころから浮かび上がってくるものである。それこそが身体をフィールドに身をおくことから始まるフィールドワークの独自性であるといえよう。

### 質疑応答と主な議論：

#### <アフェクト理論>

- アフェクトとエモーションの違いは何か。  
→エモーションとアフェクトの用語の使い方は論者によって違っていて、全体の共通理解としてエモーションとアフェクトの定義はない。時系列的にさかのぼっていくと、エモーションという言葉もアフェクトと同じような使われ方をしていたが、エモーションという言葉は基本的にはアフェクティブターン以降ではあまり使われない。「情動」という用語では、個の中だけのエモーションなのか、他者に影響するようなものなのかは分からないので、アフェクトというのは広い意味で使われている。
- 感覚は必ずしも感情を伴うわけではない。感情ではなく感覚的に体で覚えることがあるが、慣れて覚える技術みたいなものは情動の中に入るのか。  
→身体化された能力そのものがアフェクトかと言われたら、そうではないと思う。スピノザ (Baruch De Spinoza) やドゥルーズ (Gilles Deleuze) のアフェクト理論では、潜在的なものからくるエネルギーのようなものがあり、それを身体で受け止めてアフェクトする/される関係が生まれると考えている。身体的に習熟したうえで何かが直観的に分かるというのは、ブルデュー (Pierre Bourdieu) のハビトゥスを想起させ、スピノザ的なアフェクトゥスとは異なる。
- アルゴリズム的パラダイムが仮想敵とされているが、アルゴリズム的あるいは因果論的な観点からみると、共振やシンクロ現象は、自然科学においても注目されている分野である。少なくとも現象としては同じ事に注目しており、他分野と論争する必要はないのではないか。

#### <潜在性、能動的受動性>

- 潜在性とはどういうことか。  
→想定することができないけれども起こりうること、受動することしかできないようなことを指す。
- 参照している議論が分かりにくい。例えば、因果論的ではないかたちで、能動的受動性（たとえば、能動的に目が作られる）とはどういうことなのか。  
→能動的受動性の中では潜在的に様々な可能性があったと考える。必ずしも光を受け

るために今のような形の目になる必要はなかった。結果論から考えると光を受容するために目ができた、という説明になる。

- ドーキンス的な立場であっても、目的論的に目ができたとは考えずに、結果的に目ができたと考えるのではないか。そうではない、能動的あるいは潜在的なものがあるというのは理解が難しい。  
→自然選択によって、あるものが選択されてきたということではなく、今そこにあるものと捉える。アルゴリズム的なつながりの結果でできたものではなく、何も想定されないところから単に受容するということ。

### <生態的参与観察>

- 生態的参与観察について、共感的に他者（人間が人間以外）を理解するとき、擬人法に関する問題が出てくる。基本的にはヒューリスティックな擬人法のいい部分はすくいあげていくべきだと思うが、擬人法的に語ることの落とし穴にも注意しないといけない。今回の話はフィールドワークに限定された話ではなく、もっと広く適用できるものだと考えるか。  
→フィールドワーク論としては、私たちが日常実践の中でやっていることと変わらないのではないかと考えている。自分自身がやってきたフィールドワークをもとに議論しているが、その感覚は日常的に私たちがやっていることともつながるので、他の分野ともつながっていくことだと思っている。
- 人類学における参与観察は、非近代の社会を見ることによって方法論を洗練させてきたという側面がある。人間と霊長類の普遍性あるいは人間の中での普遍性に踏み込んでいくなら、参与観察を近代にも使える形で拡張すべきではないかと思う。それまでの生業研究に限らず近代における動物との関りも含めて総括的に考えることができる概念としてマルチスピーシーズがある。そういう理論とのかかわりの中で参与観察をどう拡張できるのか、何か示唆がないだろうか。  
→身体とは、皮膚で区切られた個の身体だけでなく、社会的身体と表現されるように、重層的に様々な関りの中で広がっていく。対象が何を気にして何をやっているのかを、観察者が理解できるようになることは身体の拡張と呼べる。そのような身体の拡張を必要とする研究は、重層的に考えれば、人類学的な身体を中心としたフィールドワークだといえるのではないか。

### <人類学と霊長類学のフィールドワークの関連>

- 人類学者のフィールドでの記述の仕方が、観察者の感性や技量による名人芸とも呼べるものなのか、あるいは、これくらいの感性は標準的なものとして求められるのか。

→人類学でも、エスノグラフィの書き方はさまざまで、観察者間で一致しないことは多い。そこには観察者の特色が出てくるが、フィールドで自分たちがそこにおいて経験すること理解できる部分というのはお互いにあるのではないかと思う。

- 「観察者がもっているアフェクトする/される能力を使って対象を理解する」という話と、「対象の人々同士が、アフェクトする/されるかどうか」という話は、切り離して考える問題ではないだろうか。たとえば、客観的な方法で、対象の人々同士が互いにアフェクトし、アフェクトされていることを記録可能なかどうか。

→観察者と対象というように分けられないのがエスノグラフィとして書かれることだと思う。客観的にみれば、私がいて、彼らがいて、となるが、彼らが私の外にいるわけではない。私自身と彼らを、1人称や3人称ではなく、1.5人称のようなものとして捉えたい。

- 「サルが悲しがっている」と観察者が思ったら、「サルが悲しがっている」と言えるかということ、そうではない。観察者が、サルが悲しがっていると思ったからには何らかの観察可能なふるまいがあるはずで、それを具体的に示すことをしないと、サルは悲しんでいるという記述はしにくい。

→何を見てそれがいえるのかというのは、人類学的な調査でも絶対に必要である。誰と誰が何をしたとか、こういう会話をしていたというデータをもとに、全体の中で解釈しないとイケない。人類学でも客観的なデータを示すことは必要であり、霊長類学との共通項はある。

- 観察において、恣意的な記述になりかねない要素をどう扱うかが問題である。事実関係が不正確であったり、感覚的に共鳴することを重視したりするあまりに、実際に自分自身の感覚器官からの入力（実際に見たこと、聞いたこと等）に対して誠実でない、という問題が生じる。方法論研究会の中では、人類学と霊長類学でデータのとり方をどのように共有するかが課題だったが、やるべきことは丁寧に観察をすることである。客観で行くのか主観で行くのかというようなことではなく、共振するために徹頭徹尾しっかり観察し、しっかりデータを取ることが必要なのだと思う。そうしていけば感性による主観の文学とは違うものができるのではないか。

→見たり感じたりしたあらゆることを拒否しない態度が必要だと思う。あらゆることを調べようとする態度や姿勢は、人類学と霊長類学で共通しているのかもしれない。

(以上)